

モンゴル抑留記

広島県 益田 繁美

渡 満

昭和十九（一九四四）年十月満州佐伯開拓基幹先遣隊の一員として、ハルピン訓練所に入所した。翌二十年一月、奉天省海城縣紅泡草屯の開拓地に第二次先遣隊員と合流し、総員四十三人が入植し、大豆、高粱、馬鈴薯を作付したが収穫を見ることがもなく、七月二日私と二人が召集令状を受け、私は四平街への入隊令状であった。

兵 隊

一カ月後終戦になろうとは夢にも思わなかった。翌朝三人は馬車で奉天（瀋陽）まで送ってもらい、それぞれが入隊地に向った。私は四平街の第三七四三部隊福元隊に入隊した。新しい軍服、新しい肌着、靴で日本軍人になった実感よりも、おいしい食事にありつけたことが何よりも嬉しかった。

た。満州総督府に勤めていたと言う同僚はまずいと言って残していたのを頂戴し、飲み込むように早く食べ、同僚の飯盒と一緒に洗う毎日で食事どきが一番楽しかった。しかしこれも長続きはしなかった。戦局は悪化したためか、首都新京（長春）の護衛にと、新京工業大学に移動した。

終 戦

忘れもしない八月十五日、日本歴史にとってかつてない悲劇の日、營兵に立っていた。

天皇陛下の終戦の詔勅がラジオで放送され、皆呆然と立ちすくみ、声も出ない。こんなに戦局は悪かったのであるか。外地で一体これから先どうなるのだろうか、不安がよぎる。まあ、これだけ多数の日本人がおり、死も生も一蓮托生で共に行動しなければもう一人の力ではどうにもならない。

八月十九日、ソ連軍が黒龍江を超え南下していき、その情報が流れて来た。部隊は直ちに公主嶺に集結との関東軍本部より命令があり、新京より公

主嶺に向け移動を開始した。丁度一週間前ごろよりの雨で、大陸の道はぬかるみであった。

公主嶺

范蒙屯を少し過ぎたころであっただろうか、部隊の横合いから突然銃弾が飛んで来た。高粱畑の中からである。一斉に散開し様子を確かめようとするも、八路軍ともソ連軍ともわからない。応戦してもよいものやらと思う間もなく、我が兵隊が斃れたのでついに応戦。生れて初めて実弾を射つた。肩に食い込む銃底の感触、初めての最後である。相手はソ連兵で小隊であったのか、我が戦車隊が応戦で戦闘は中止されたが、終戦の宣言から既に五日も経っているとき、この無茶な行動で死んだ人こそ浮かばれない。自分達が最初撃つたことは棚に上げ、日本兵が攻撃したとすることで直ちに武装解除をさせられ、マンドリンという自動小銃を肩から斜めにかけて、馬上から逃亡兵を警戒してか時々ダダダと威嚇射撃をする。

追われる羊のごとく、ぬかるみの中を飲まず食

わず、休むことなく開魯方面に拉致されたのである。夜は馬の尻尾につかまり、寝ながらの行軍、昼は空腹のため泥水をすすり飢えをしのいだ。

雨の中飲まず食わずに歩く足

新らしき編上靴大きく口をあけり

二日目にやっと小休止、ソ連と日本の将校が集まって協議している間に、馬の飼料である玄高粱を流木で炊き、渋いのもかまわずほおぼり空腹を満たした。

ごめんと言いつつ馬の糧

ほおぼる口元高粱のシブ

日本とソ連兵との話合いがいつたのか、八月二十三日公主嶺に向かって引き返した。途中日本兵の死体、高粱畑の中に日本婦女の半裸の死体、恐らく強姦後殺されたのである。これらも敗戦の姿とはいえ、シヨックは大き過ぎた。正義の美名に隠れ繰り返される戦争。

大陸に恨みを飲んで死んでいった人のことを忘れてはならない。

公主嶺に着いてからは日課と言ったものは別に
なく実にはのんびりしたもので、外出なしの休日であ
った。内地に送還されることばかり考え、ソ連
領に抑留されることなど夢にも思わなかった。

北 上

九月も過ぎ十月に入ると朝夕の気温も下り、寒
さが加わると共に不安もつり、暖かなうちに戦
争も終わったのに早く帰して欲しくないのだろうか、
これでは越冬も覚悟しなければならぬと思つて
いる矢先、千五百人ずつ大隊を編成し、ウラジオ
ストクより内地送還のニュースが入った。

この調子なら年内には日本に帰れるかも知れな
いと同僚と手を握り喜び合い、その日を夢見てい
た。いよいよ順番が近付いて、関東軍の倉庫にあ
る被服や、防寒靴、外套、防寒帽の配給があつた。
もう不用だから内地に持ち帰れということぐらい
に思つていた。列車の順番が来た、貨車である。
貨車には荒削りの松板で二段になっていた。これ
に一貨車四十人ぐらいが積み込まれた。貨車は四

十五両編成である。その中には炊事車があり、糧
秣車、自動車も水もドラム缶に満水した貨車、一
大隊千五百人の輸送である。

ウラジオストクまでならこんな大げさなことは
不要であるう、どうも変だと思つてもどうするこ
ともできない。貨車の屋根には自動小銃を持った
ソ連兵がダバイダバイと急ぎたてる。もうこの千
五百人と共に運命を託そう、行き着くところまで
行こうと度胸をすえた。

十一月十八日、満州北端の黒河に着き、今夜は
野営である。外気温は零下一五度、初めて迎える
満州の冬ではないが、野営と虜囚の寒さはことに
身にしみる。

十一月二十四日、初めて見る黒竜江の結氷で五
十センチか七十センチはあるであろう。表面は凸
凹がひどく背丈もある不透明な氷の岩が川面にあ
る。その間を縫つての渡河が始まった。貨車の荷
物を全部運ぶので大変な量であつた。河幅約二キ
ロを櫓で一日かかってブラゴエシチエンスクの街

に着いた。初めて見るソ連の町、レンガ造りの家の窓から女や子供が珍しそうに見ている。それを横目に歩く身は哀れで虜囚の感がひしひしと迫る。道は雪で被われ、白一色の極寒の国である。その中を全く見せ物のように停車場へと行く。また同じ様な貨車で二段にしてある。それに乗り込み貨車はブラゴエシチエンスクを夜中に発車した。

行先はウラジオストクであろうと思っていたが、どうも変である。駅に列車が停まったとき、小用に立って星を見ると北斗七星が進行方向右真上にあるではないか。月の光で隠し持っている磁石、確かに北に向っていた、不安は適中した。

凍てつく黒河を渡り終え

貨車の右に北斗星あり

明けても暮れても暗い貨車の中は憂うつそのものである。食事時は広々とした野原、エゾ松林の森の中、列車は停まったときに活気がある。これとて、ソ連兵監視の中である。

寒さは日増しに加わり、貨車の鉄戸は凍り、四

面の鉄壁は白く霜を吹き、まるで冷凍庫である。二週間ぐらいか身体が痒い、虱が動くのが感じられ、寒いとは言え日中は気温も二〇度近くまで上昇するので真裸になり、虱取りである。一番目につくのが禿である。白く二ミリぐらいで腹の部分が黒い奴、宝石のような卵。

シラミ取り日常日課となりけり

西に走る虜囚貨車の一カ月

列車がチタ駅を過ぎたとき、三人の日本兵が箒を持って線路を歩いていたが、僕らの列車に近付き、自分らは十月にこのチタに送られた、そして、日本兵を乗せた貨車が次々と奥へ向い、運ばれていると言っていた。

やがてウランウデ、世界で一番深い湖と小学校で習っていたバイカル湖が近い筈だと思っていたとき、誰かが「湖が見えるぞ」と言うので見ると、一面氷が張り白く見えるだけであった。このバイカル湖を越えることはなく、小さなナウシカに列車は停まった、ウランウデより南に約五キロの所

で外蒙古の入口である。

ウランバートルへ

鉄道はここが引込線らしく駅らしいものもない。自分の持物と言っても、雑嚢と背嚢と防寒外套だけであるが、下車した所は一面雪の中である。内地の雪は重たいがこの雪は軽い、足で踏んでも固まらない。気温が低いいためか、乾燥しているためかであろう。

ここは外蒙とソ連の国境である。今まではソ連兵の監視であったが、ここから蒙古兵の警備である。小学校で習った元寇げんこうの役の蒙古兵の絵にそっくり。獣の皮帽子に、真赤な鳥の羽根を頭につけている。一瞬タイムスリップの感じである。

これより雪中行軍の様子である。ソ蒙国境の山、また山、内地の山は樹もあり、谷も深い、木もなく荒涼とした山々、ただ白いものばかり。この山の向うにあるスフバートルへの行軍が始まった。

四〇度の傾斜のある山道、一つ越え二つ越えたあたりから、軽いと思っていた荷物も肩に食い込

む重さ、脛をかむように歩く者。ついに疲れ果て、道端に座り込む者、無言で誰もが悲壮な顔、吐く息で防寒帽はつららで板のようになっていた。泣き出しそうな顔、まだ目的地までこの雪の山を三つも四つも越えねばならないらしい。誰かが板切れをどこかで見付けたのか、四、五人が橇のように荷物を乗せ引っぱっていた、僕も真似をした。大変楽になった。早く気付けばよかったと後悔しきり。

なけなしの物をかすめる蒙古兵

腕に並べ、時計見ること知らず

ついに六つか七つの山と谷を越えたであろうかスフバートルと言う所に着いた。人家もあり、町かと想像し、温かいものでも食わせるのかと思っただが大はずれ。二棟ほど破れた倉庫があるだけで、山と山の間の平らな、茫々とした白一色の場所であった。今晚はこの倉庫みたいな建物に寝るのか、窓は破れ、壁板は所々はがれている。その隙間から山の雪の白さが冷たく凍りつくように見える。

とにかく人間扱いではなく荷物扱いである。

電灯もなく、床板もなく、ただ雪が無いだけである。背囊から身体につけられるものは全部着て、足は三重に足袋を、さらに雑囊をかぶせ寝ようとしたが眠れない。両親のこと、兄弟のこと、今ごろどうしているだろうか、家では繁美が、兄がどのような事になっているとは想像もしていない。

地獄は死んであるものでなく現世にあることを知らされた。これを持ち越えなければと自分自身を鞭打ちつつ、とろっと疲れで眠った。

夜が明けて人員点呼のときは三人が凍死していた。周囲を見ると、大型のトラックが十数台並んでいる。タイヤの数が十本、背丈ほどもある。当時は珍しく、大した物を持っていると感じた。今は走り回っているダンプである。次々と班ごとに乗車し、広い通路に出た。どのダンプもすし詰め、三、四十人は乗っているだろう。頭にはシートを被せ、零下二〜三〇度の中を走る。夕暮れ着いた所は外蒙古の首都ウランバートルであった。

小高い丘の上で、そこは「ホジルボロン」と言い、急造りの日本兵収容所で床は二段になっているらしく、三段の階段を上がり一つ目のドアを二メートルぐらい入って二つ目のドアの入口がある。一つ目のドアを入れて右が石炭置場になっている。内部は荒皮の付いた二段の棚が左右にあり、奥にペーチカがある。

この収容所は第三大隊（小林太郎少佐）で、私は四中隊（大野輝芳中尉）三小隊（野村少尉）に所属、室内に入り、装具を下していると兵隊が一人うずくまって動かない。皆がどうしたどうしたと見ると右腕が白くなり、室内の暖気で痛み始めたのである。凍傷である。十時間余りも車の外側に乗り、腕がシートより出していたのか触れていたであろう。軍医が来たが切断以外に方策はないと言って医務室に連れて行ったが、二日目に死んだらしい。車上では体感温度は零下五〇度近くにも感じ、常に手指、足指を動かしていなければならぬのである。

食糧

もう年末間近である。入所してから食事が悪い、毎食キャベツの刻んだ葉っぱが十五、六枚入って、飯盒の上の線までのスープだけで後は何も無い。現地人は羊が主食である。

年末はこの状態で過ごした。あたり二十の青春期をと残念に思い、あわれさを感じる。戦友と正月料理や餅の話、食べる話を語り合い自分を慰める。今は量以外何も無い、空腹をかかえて寝るばかりだ。近ごろ数字を数える覚力もなくなった。大分頭が変になったようだ。

十二月三十日三小隊が糧秣の使役である。炊事の糧秣を外蒙兵がトラックで運んで来た。肉ではなく臓物である。臓物はラクダか馬であろう。穀物は小豆で麻袋に入っていた角に少し穴をあけ、服のポケットに入るだけ詰め込み、臓物は空腹のため煮るより生で隠れて周囲に気付かれないよう口に入れた。臓物を生で食べるなど全く想像もしなかったことである。

正月になって、初めて小豆の粥が出た。それも飯盒の外蓋に一杯で臓物が入っている。生ではそれほど感じなかったが、鼻持ちならぬくらい臭い。鼻をつまんで、箸はいらぬので流し込んだ。正月も過ぎ使役に出ることになり、小豆粥に黒パンが付いた。黒パンは一食五ミリ幅である。到底空腹を充たすことにはならない。

飯盒にキャベツのスープ十五枚

多汁多少で喧々ごうごう

幅五ミリ黒パン分ける物指しを

見つめる瞳のするどさよ

空腹は何ものにも耐え難い、パンの分配も非常に騒がしくなり、ついにくじ引きで自分の分配を取ることになった。

二十一年一月中旬、ホチリブロン山の収容所より、ウランバートル街に近いチャガラントン収容所に移動することになった。

使役

この収容所に来ても空腹を満たすことはできな

かった。ただ室内が暖かくそして少し明るい、僕らはどうやら土木建築の労役に服すらしい、昨夜も経験者を調べていた。

僕は嘘であるが、大工の経験が多少あると大工を志願した。第一に食糧確保、第二に気分転換である。将来どんなになるか、仕事が苦しいかもしれないぬ、寒さと飢えとの両方だ。体も十八歳のとき肋膜炎を患い、第一乙の身である、丈夫ではない。一か八か与えられた運命であり試練であると思ひ、自分への挑戦である。

月末となり、外蒙古兵に前後を警備され、初めての使役に出ることとなった。草一つない凍土の原野を約一時間、着いた現場は共産大学の建設である。僕の班長は五十嵐辰太郎兵長で工務店の社長で、何も知らない僕を親切に指導していただいた。経験がない、事務系百姓等は皆、基礎の穴掘り、石切り作業である。穴掘りと言っても、鉄のバール一本で一日に半立方メートル、五十センチ、深さ一メートルがノルマであるが、凍っているの

で中々の重労働である。気温は零下一〇度から二〇度、着られるものは全部着ての作業である。二十キロ近くあるであろう。

幸いに僕は足場作り、班長の指示通りに動いていけばよい。ゲーペーウーが巡回してきたら金槌で釘でも打つ真似をするのであった。

一日の作業が終ると隊列を組み蒙古兵の監視で収容所に帰る。夕暮れになると気温が急に下る。

防寒帽板の如し凍りつく

極寒のなかを追る羊のごとく

朝作業に出るときはよいが、帰りはつらい。それは蒙古兵の員数調べである。整列しているので縦の人数と横の人数を掛ければ、すぐ全体の人数が分かるのに、その掛算さえ出来ないらしい。一人一人数え、途中で数え違いをすると元からやり直す。その員数調べにしばらく時間がかかる。あの寒さの中で長時間立たされるのはつらい。足が痛くなる、皆足踏みをして待っている始末である。今一つ便所が兵舎より百メートルも離れた所で、

極寒の中の往復は大変な事であった。尻も痛いほど冷たい。手もかじかんでボタンも掛けられないようになる。便所と言っても建物があるわけではなく、ただ茫茫とした原っぱに三十センチの溝を掘っただけで、これをまたいで用を済ますだけである。済ますと直ぐに凍る。いっぱい山盛りになると、当番制でモッコを作り、バールで起こし、低い地形の一カ所に捨てるのである。小用は近くであるが、済まし終わると山となり、一氷塊となる。

抑留し始めてノルマと言う言葉を知った。蒙古兵はソ連兵に命令された下っ端の仕事の監視が主な任務で、日本人を動かしているのはソ連兵である。誰も一日にしなければならぬ一定の仕事の量を決めていて、その量を超えると褒賞としてその人に食糧を与える仕組みで、日常腹三分くらいしか与えない若い現役甲種合格の兵隊は褒賞のパン欲しさにノルマを達成していた。褒賞と言って一センチ厚さの黒パンである。全員がノルマを達成すればノルマを引き上げるので、栄養と労働

のバランスが崩れ、一、二カ月続くと痩せて骨と皮になり次々と倒れていった。僕は開拓団に入植以前の病気から、人並みに出来ないと言いきかせ一度も褒賞パンをもらった事はない。ただ、ただ生きて日本に帰れることを願うのみで仕事の量は七〇パーセントでも殺しはすまい、空腹はつらいが、水で満腹感を一時的に充たした。しかしこれがいままで続くか、長引けばこの蒙古の土となるかも知れない。

阿倍仲麻呂が支那で歌った歌を思い出す。

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

はるか東方に昇りし月、仲麻呂の心、感無量で涙が頬をつたう。父の顔が、母の幻が、この月を見ているだろうか。

無雲無雪夜方深

無雲、無雪、夜まさに深し

皎皎明鏡覚里心

皎々たる 明鏡 里心を覚える

弟妹今宵饑饉否

弟妹は 今宵は もちを供えているや否

天輪以母涙沾襟

月は 母に似て 涙が襟を沾す

九月いつごろであったか、朝目覚めてみると隣に（隣と言っても毛布を三折りにした、六十センチ幅が一人の寢床）寝ている斎藤君が動かない。いつも一人が起きるとごそごそするのに動かない。変だなと思ひ声をかけても返事がない、オイとゆすってみると死んでいる。

昨夜は彼の出身地青森県での納豆餅のおいしい話を二人でして寝たのに、班内は声もない、明日は我が身かも知れないのである。

故郷を夢見て、肉親を思い浮かべながら死んだ友、もはやどうすることもできない。入口の右にある石炭置場に裸にし、背中に名前を書き、そのまま入れ、死体が数多くなったら、山に運び埋めたのである。装具と毛布は班内で分ける。死んで駄目だ、石にかじりついても生きて日本に帰り

たい。

枕よせ納豆餅の話し食い

朝は冷たき戦友哀れ

なき戦友の肌着を分けて生き延びた

酷寒の中の友のぬくもり

今日は零下三一度で作業は中止となるらしい。班内待機でのんびりしていられた。横になりうとうととするが脇の下や、陰毛のあたりが痒い。下着を着替える。着ていたシャツ、褌を雪の上に並べ零下三一度の気温で虱を殺すのである。油断すると褌でも盗難にあうので二時間は監視していなければならぬ。

近ごろ、臍物の入った臭い小豆粥にも別れて以前ほどではないが、食べねば死あるのみである。この状態が一年半続いた。

蒙古の夏は三カ月で、残りは冬である。五月から八月の終りまでが夏であるが、朝夕の温度差が大きい。朝夕は七、八度まで下り、日中は二〇度ぐらいになる。一年中防寒外套は手放せない。草

も五月終りに一斉に芽吹き、八月には終る。作業の往復にノビル、タンポポ、野ゴボウ等食べられないと食べられないので夏の上衣と岩塩一握り余りと交換した。しかし空腹は充たされない。

一日一日と日を重ねるにつれ、一日十時間の重労働は次第に身体を侵し、体力の弱い者は、次々と倒れてゆく。早く日本に帰りたい。一体いつまで酷使する気であろうか。この地獄の世界から抜け出したい。全員が死ぬまでロスケは使う気である。

朝の点呼でまた一人倒れた。気力は持っていない、体の自由がきかない。体力の消耗を減らす以外ない。忍耐あるのみである。

共産大学の建築も九月に入るとほぼ完成し、今度はこの使役か、もうこんな所から逃げ出した

い。
帰還

忘れもしない、十月九日、いつものように作業

に出ていると、急遽帰れとの命令である。何ごとかと収容所に帰ると、移動だと言う。今の冬もここで過ごさねばならないのかと思っていた矢先である。どこにでもいい、こんな所には居たくない。移動先の方がまだ辛いかもしれないが、ひよつとすると、内地へつながるかも知れない移動である。寒々と冴え渡った月明りの中、ウランバートルを見下ろす三層のラマ寺のあるガンドン、街の灯は幾多の命果てた同胞の霊が近寄り見送っているように見える。輸送のダンプが来た、出発である。車は二年前と同じように頭からシートをかけ、坂道を登ってゆく、三百五十キロの同じ道をソ連領に向い北進する。

そしてノウシカより貨車に乗せられ、見覚えのあるウランウデ、チタ、貨車は東進しているではないか。ひよつとしたら日本に送還かも知れないが喜ぶのは早い。ソ連人のことだ、途中伐採にでも入れるかも知れない。幸いウランバートルより暖かそうである。生きられるかも知れない、どん

な事があっても生きなければならぬ。運を天に任すが、運を生きる運に結び付けたい。列車は東進を続けていた。帰還が本当かも知れない。必然的に心は明るく躍る。蒙古を出て二十日ぐらい経ったであろう、十一月月上旬ともなると次第に気温も下り列車の天井に白い霜の花が咲き出した。ハバロフスクは夜通過したのか列車は一路南下している。ウラジオストックへ鐵路は続いていた筈故郷日本への玄関口だ、待望の港である。ハバロフスクを過ぎたころから早や一週間はたつ、もうウラジオストックではないだろうか。町らしいものも、海も見えない所に列車は停まり、下車させられた。ここがナホトカであった。十一月十三日、延々四千キロ、実に三十六日、やっと貨車輸送の旅は終った。

すでに先着の部隊があり、ごったがえしている。更に後続の部隊が次々と到着する。少し歩いて下を見ると海である、港である。沖合に停泊している船に日の丸の旗が見える。初めて本当に日本に

帰れるとの実感が湧いた。今度こそ帰れるのだ、肉親や懐かしい人のいる故郷へ。お互い無事に生きていく喜びに満ち満ちたナホトカである。

沖には日の丸をはためかせている船、内地がそこに来ているのだ。あの船の中はもう日本なのだ。ただ、ただこの日のあることを願いつつ頑張った二年余り、長い長い辛い日々であった。夢にまで見た帰国の日、胸の中を去来するこの感激、何に例えようもない。

乗船を待つ間にも捕虜感覚のソ連は遊ばせておくことはしない。道路修理の使役にかりだされた。四日目くらいか、整列の声がかかる。いよいよ乗船らしい、港に通ずる通路に立って腹の底から湧き上がる感動の喜びは筆舌につくし難い。この二年余りの辛酸は、孫子の果てまで味合せてはならない。

沖に停泊していた帰還船は今接岸した。いよいよ乗船、内地の匂いのする船の人、船尾の昔と変わらぬ日の丸の旗、タラップを上る足の軽いこと。

一步、足を船内に踏み入れればもう日本だ。夢にまで見た祖国への船「信洋丸」は今ナホトカ港を出航せんとする。

ボーッと鳴り渡る汽笛は狭いナホトカの港の山野に響きわたる。解放されたこの安堵、喜び、サヨナラソ連、ナホトカ。

昭和二十二年十一月十七日、オーイ見えたゾーと、誰かの叫び声が甲板でする。皆一斉に甲板に上る。青くかすむ日本の山々、言葉もなくじっと見つめていると胸が熱くなり、涙がこみあげる。

山がボーとかすむ。一際高く鳴り渡る汽笛とともに船は函館棧橋に接岸した。二年余り見たことのない船は、モンペに白の割烹着姿の日本の女性、現実には帰ったとの実感。丁度十一月はいい蜻の獲れる時期とかで、一匹差し入れてもらった。長い間小豆粥で過ごした口、おいしいこと。一匹ただくと満腹であった。検疫を済まし、帰郷の列車に乗ったのが十一月二十四日、一路広島へ、廿日市駅に着いたのは夜中の一時過ぎ。駅の木製ベン

チに横になり眠った。なんと暖かいことか。朝マキノバスで友和に帰る。途中、姉が迎えに来てくれる、母の作った味噌汁と白い飯、胸にこみあげるのであった。二十二歳、自分はこうして親の温かい心を噛みしめ、内地に帰ることができたが、多くの友が夢に描きながらあの凍土の土となった。これら友のお陰で自分はこうして生きて帰ることができた。これからは友の分まで人生に貢献するよう努力しなければならない。

しかし、自分にはその才能がない、もし人が頼めば恥をかいても良い、少しでも手助けをしよう、努力しようかと心に誓うのである。

縁あって、平成二（一九九〇）年、友の墓参の機会を得た。復員して四十五年目である。その間死亡した人もおり、奥さんや家族が同行し、総員二十一人であった。

展 墓

山河来弔北蒙濤

山河に來り弔う北蒙の濤り

豈図天空銃弾浸

豈図や 天空を銃弾の浸すとは

廿五星霜泉下恨

二十五 星霜 泉下の恨

墓前長哭潤沾襟

墓前に長哭して 涙襟を沾ほす

注 展墓Ⅱ墓参りのこと

天空銃弾浸Ⅱ墓地在モンゴル兵演習場の着弾地であった

抑 留

昭和二十年十二月十一日 外蒙古ウランバートル ホヂリブロン収容所

小林大隊第四中隊

昭和二十一年 チヤガラントン収容所

所

昭和二十二年十一月十七日 信洋丸にて函館引揚

帰国後の職歴

昭和二十八年四月 友和村農業協同組合就職

昭和六十二年 佐伯中央農協 監事

平成八年六月 佐伯中央農協 代表

監事

平成十四年六月 佐伯中央農協 監事

事退任

以後、農業八〇アール耕作、現在に至る

全抑協会員として、地域活動に積極的に参加。

(広島県 岡田 隆)

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四（一九二五）年三月五日

学 歴 昭和十四年 友和村立友和尋常高等小学校卒業

入隊前職歴 旧満州奉天省海城県紅泡草屯

佐伯開拓団本部営農助手

軍 歴 昭和二十年七月二日第三七四三部隊

福元隊

昭和二十年九月 武装解除